

『ヒロシマ・ノート』再読のために

楠 田 剛 士

1. 書誌

大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（以下『ノート』と略記）は、はじめ雑誌「世界」に掲載された。以下のようなタイトルと順番である。

- ① 「広島 一九六三年夏」（『世界』一九六三・一〇）
- ② 「広島再訪 一九六四年夏」（『世界』一九六四・一〇）
- ③ 「モリストの広島」（『世界』一九六四・一一）
- ④ 「人間の威厳について」（『世界』一九六四・一二）
- ⑤ 「屈服しない人々」（『世界』一九六五・一）
- ⑥ 「ひとりの正統的な人間」（『世界』一九六五・二）
- ⑦ 「広島へのさまざまな旅」（『世界』一九六五・三）
- ①と②のあいだに一年の開きがあり、②と⑦が「ヒロシマ・ノート」の見出しがついた連載になっている。①と⑦を加筆修正したの

が、⑧初刊の『ヒロシマ・ノート』（岩波新書、一九六五・六）である。プロローグは書き下ろしたが、第七章とエピローグは⑦を増補したものである（⑦の*で区切られる前半が⑧の第七章、後半が⑧のエピローグのもとになっている）。また①と②にあった写真は初刊では削除され、新たに丸木位里・赤松俊子『ピカドン』を挿絵に、セバスチャン・カステリヨンの言葉をエピソードに置いている。

再刊として、⑨『大江健三郎同時代論集2 ヒロシマの光』（岩波書店、一九八〇・一二）、⑩『日本の原爆文学9 大江健三郎／金井利博』（ほるぶ出版、一九八三・八）があり、いずれも⑧と若干の異同が見られる。また、⑩池澤夏樹編『日本文学全集 大江健三郎』（河出書房新社、二〇一五・六）には⑧のうち「人間の威厳について」を再録する。⑧については、一九九五年六〇刷で差別用語などが訂正された。たとえば、「つんば棧敷で忍耐していたのである」（第一章）↓「情報をえずに忍耐していたのである」、「つんば棧

敷に置きざりにするとき(第一章)↓「か、の外へと置きざりにするとき」、「かつての屠殺人は」(第三章)↓「この聞き書きの主は」、「かつての屠殺人が」(第三章)↓「もと屠場の働き手が」、「といった書き換えである。電子版が二〇一九年一〇月から配信され、二〇二一年九月の第九六刷から改版されている。

翻訳は、アラビア語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、イタリヤ語、韓国語、ロシア語、スペイン語の九つの言語で行われ、(Urszula Styczek [Bibliography of Translations of Selected Atomic Bomb Writers - Analysis (Part 2)]「県立広島大学人間文化学部紀要」(二〇二〇一七・三)、および、ウルシユラ・ステイチェック「世界で読めるヒロシマとナガサキ——Linguahiroshima のデータベース」[多言語で読む広島・長崎文献]をめぐって」(県立広島大学人間文化学部紀要)一四、二〇一九・三)参照。

大江の小説における加筆修正について、服部訓和『大江健三郎全小説』と大江研究(「昭和文学研究」七九、二〇一九・九)は、「近年の大江の自作修正で最も特徴的なのは差別語の修正であり、「概して大江研究では、書誌研究や本文研究等の地道な蓄積が足りない」と述べている。大江が小説だけではなく多くのエッセイを執筆してきたことを考えると、『ノート』をはじめとするエッセイも書誌研究、本文研究を今後積み重ねていく必要がある。

2. 先行評

『ノート』の初出・初刊から五〇年以上が経過しており、多くの批評が行われてきた。作家活動のなかでの意味づけを行う論文がも

つとも多い。(1)作家としての態度を批評するもの(政治性の弱さ・不徹底を見るか、作家的成長を見るか)。(2)同時期の小説作品である『個人的な体験』『空の怪物アグイー』『アトミック・エイジの守護神』との関連性を指摘するもの。(3)先行するルポルタージュ『世界の若者たち』(一九六二)、『ヨーロッパの声・僕自身の声』(一九六二)との関連性を見るもの。(4)その後の『沖繩ノート』(一九七〇)との関連性に注目するもの(継続・発展と見るか、パターン化と見るか)。(5)その他の大江作品と比較するもの。(6)思想的背景を検討するもの(実存主義、民主主義、ユマニスム)などがある。また、大江と同時代の政治的文脈との関わりに注目する論文として、(7)ナシヨナリズムの問題を指摘するもの、(8)ナシヨナルな語りからのずれを分析するものがある。大江以外の作品と比較されることもあり、(9)山代巴編『この世界の片隅で』(一九六五)、石牟礼道子『苦海浄土——わが水俣病』(一九六九)などの記録を含む文章や、(10)丸木位里・赤松俊子『ピカド』(一九五〇)、土門拳『ヒロシマ』(一九五八)などの視覚表現に注目する論文などがある。そして(11)大江自身による自己解説がある。一つの論文でも(1)と(2)を合わせて論じたりすることがあるので、右はとりあえずの分類である。以下、具体例としていくつ

かの先行評を時期に分けながら取り上げる。

一九六〇年代後半から七〇年代はじめにかけては、大江の政治的態度の是非が強く問われていた。たとえば吉本隆明「戦後思想の荒廃——二十年目の思想状況——」(「展望」一九六五・一〇)がある。吉本は「被爆者の同志」であるよりほかに、正気の人間として生き様がないと居直るにいたって、じじつはたんなる異常趣味

に陥こんでいったのだ。このとき、じつは（被爆者の同志）でもなんでもなく、第三者に転化したのである。「大江健三郎の異常趣味は、当然のことながら、国家権力とたたかえない現状を熟知するがゆえに、ベトナム問題や原水禁大会に血道をあげている政党諸派や、この世界を社会主義圏と資本主義圏に国家同盟としてふわけしようとする古典的政党派の趣向に投じ合体する」と、大江を職業作家としても政治的態度に関しても批判している。

江藤淳・吉本隆明「対談 文学と思想」（『文藝』一九六六・一）においても、吉本は「反体制的な思想において、徹底性を欠いていると思うのです。大江さんなら大江さんの『ヒロシマ・ノート』あるいは『厳肅な綱渡り』でも徹底性を欠いていると思います」と繰り返しており、さらに大江が評価する「原爆の図」や峠三吉の詩を「芸術としてよくないがゆえに、どんな意味でもよくないですね」と断じる。江藤も吉本に同調しながら、「『厳肅な綱渡り』になったり、『ヒロシマ・ノート』になったりすると、どうしてああ他人のための言いかたをするのかよくわからない」、「意識にはのぼらないくらい根強い自己欺瞞だ」と疑問を呈している。こうした批判は大江個人に向けられており、『ノート』の本文が十分に検討されているわけではない。また「原爆の図」や峠三吉の研究が進んだ現在から見れば、それらが持つ魅力や可能性をとらえた大江の先駆性が評価されるべきだろう。

とはいえ『ノート』を通じての大江批判には枚挙に暇がない。助川徳是「『ヒロシマ・ノート』と「壊れものとしての人間」」（『國文學 解釈と教材の研究』二六・一、一九七二・一）は、「その書かれた時点にある種の有効性をもっていたことを私は否定しない」と

述べつつ、「憎悪をバネとする狂爆^マなヒューマニズム——大江にはそういう絶望的なヒューマニズムの毒々しさへの想像力が欠落しているのではあるまいか」と批判する。また「誰もがかれの想像力に期待するのは、かれの創作がわれわれに喚起するイメージなのである」と、ルポルタージュよりも創作小説への期待を込めて結んでいる。

遠丸立「『ヒロシマ・ノート』——その位置」（『國文學 解釈と鑑賞』四五二、一九七二・七）は短い批評だが、「作者自身のはまりこんでいる苛酷な窮況から這い出すための精神的支柱をもとめ」、「回心」していく中国訪問に『ヒロシマ・ノート』と『沖繩ノート』の原型がある」と大江の前後の活動に注目しており、後の高橋論にもつながっていく。結論部は、『ヒロシマ・ノート』においてきわだたされた彼の特徴的なルポルタージュも、『沖繩ノート』にいたってみずみずしさをうしない、パターン化への傾斜を強めている」として、大江の今後のルポルタージュに「多くを期待することができない」と否定的である。『沖繩ノート』に関する議論は以降の他の批評でも続いていく。

霜多正次「人間の威厳ということ——大江健三郎『ヒロシマ・ノート』にそくして——」（『民主文学』六九、一九七二・八）は、「原爆体験を自己の個人的な体験とむすびつけて内面化することで、被爆者たちの強靱なヒューマニズムに「人間の威厳」をみる」ことを評価しているが、「それだからおさらのこと、私は大江が平和運動の分裂に対して、真剣な対決の姿勢を欠いていることに、不満を感じないわけにはいかない」と不満ももらし、平和運動への積極的な関わりを求めている。

こうした不徹底さの批判は以降も行われていくが、一方で『ノ

ト」を作家の成長記録として肯定的にとらえる論も同時期から多く発表されてきた。

野口武彦『吠え声・叫び声・沈黙——大江健三郎の世界』（新潮社、一九七・四、二二九—二四〇頁）は、「大江氏の『ヒロシマ・ノート』が数多く書かれたこの種のルポルタージュとちがっている少なくとも一つの点は、一瞬もその全体をつらぬいて眠りこむことを知らぬ鋭敏な痛覚である」として、個人の感覚に鋭敏になることが、他者の痛みへの想像力を開いていると指摘する。また「広島訪問の以前と以後とは、そしてまた大江氏が父となる以前と以後とは、作品の主題や方法はもとよりのこと、何よりも想像力の位相において相違している」と述べ、長男誕生と広島訪問を大きな転機としてとらえる。

篠原茂『大江健三郎論』（東邦出版社、一九七三・五、二〇五頁）においても、『空の怪物アグイー』と『個人的な体験』とに描かれたような事情、そしてその苦しみを背負いながら『ヒロシマ・ノート』の冒頭に記されたような状況のなかで苦悩を深めた末に感じたことは、彼の内部に生きる戦後のすべてを検証せねばならぬという切実な必要性であった」として、好意的に受け止めている。

磯田光一『大江健三郎における「政治」と「性」——『厳粛な綱渡り』と『ヒロシマ・ノート』』（図書新聞、一九七三・八）は、『ヒロシマ・ノート』の筆者の心は、彼を現代に固有な作家たらしめてきた「性的人間」としての痛いほどの自覚をも忘れようとしているかのようだ。大江氏のヒューマニズムへの加担を、文学上の退歩と呼ぶこともできよう。しかし私は、人生という広大な沃野には、文学の本質から遠ざかっても他の価値を選ばねばならぬ瞬間のある

ことも知っている。（略）『厳粛な綱渡り』『ヒロシマ・ノート』から感じられるのは、一人の稀有な資質をもった作家が現実を引きさかれてとまどっている姿である」と述べる。批判の対象であった弱さや不徹底さは、「ここでは現実への真摯な姿勢として解釈されている。

長岡弘芳もまた大江の真摯さを評価する。『原爆文学史』（風媒社、一九七三・六、七五頁）において「被爆後二〇年の歳月を、その地で誠実に一身にひきうけ、人間の尊厳を示し続けた（真に広島のな人間たる特質をそなえた人々）を辿ることで、かつそれらの人々を（ヤスリとして、自分自身の内部の硬度を点検してみたい）と願う真摯な魂の表白として、若い世代を中心に広く感銘を呼んだ」とまとめ、大江の「誠実」で「真摯」な姿勢に他者が共感したことを紹介している。同様の記述が『原爆民衆史』（未來社、一九七七・七、二二九頁）、『原爆文献を読む』（三一書房、一九八二・七、八五—八六頁）にもある。

次に七〇年代後半から九〇年代前半を見ていく。川西政明『大江健三郎論——未成の夢』（講談社、一九七九・一〇、一〇—一五頁）は、自身が広島に長く住みながら大江のように「広島に対して非当事者」であるとしたうえで、「当事者と代理者の溝に足をすくわれながら、代理者として誠実でありつづけようとするために、当事者から発せられる批判に、あたかも自分の裸身をさらすようにして、その批判の正当性を受容しようとする、その誠実は欺瞞的だと疑わざるをえなかった」と疑問を示す。ただし小説は評価しており、「イメージと思索が真に同一化」していると述べ、本書全体は小説を論じる書となっている。

黒古一夫『原爆文学論——核時代と想像力』（彩流社、一九九三・

七)においては、「大江は障害を持って生まれた息子という極的な問題をかかえて、そのストラグル(困惑)の延長上に「ヒロシマ」を経験をせざるを得ず、その結果(人間存在の尊厳・崇高)という本質にたどりつくことができたのである。おそらく、大江は後に『個人的な体験』(六四年)に結晶するような、障害児を持った親という決して(きれいなこと)では解決しない私的問題と直面していたが故に、(生けとし生けるもの)に対する深い愛情と理解を広島において感得できたのであろう(七五―七六頁)と大江の態度を共感的にとらえる。また黒古は先に見た吉本隆明の『ノート』批判を取り上げ、「吉本は、開高健や大江健三郎が試みた(アンガージュマンの文学)の可能性を批判することで、自らが政治の現場と関わらないことの正当性を(思想)の名においておこなっていると、考えられる」(七九頁)と吉本への批判を行っている。黒古の大江評価・吉本批判は『作家はこのようにして生まれ、大きくなった——大江健三郎伝説』(河出書房新社、二〇〇三・九)、『原爆は文学にどう描かれてきたか』(八朔社、二〇〇五・八)でも繰り返し返されている。

与那覇恵子「ヒロシマ・沖繩」(『國文学 解釈と教材の研究』三五・七、一九九〇・七)でも、『ノート』は「人間らしく引き受けていくということの再確認」であり、『沖繩ノート』は「誠実に自分の問題として考えていこう」とする発想があるとして、大江の「誠実」さを挙げている。

このように『ノート』を通じて大江の政治性の低さ・弱さを見るか、作家の誠実な態度を見るかがやはり話題になっているが、『ノート』の構成や叙述方法に注目してテキストを分析する論がこの頃か

ら登場する。

菊地昌典「想像力における政治——『ヒロシマ・ノート』『沖繩ノート』を中心に」(『國文学 解釈と教材の研究』一九七九・二)は『沖繩ノート』も取り上げながら、「この二冊のノートは、まぎれもなく、自分を対象に没入し、沈黙を言葉にかえることに成功した作品であり、沈黙する威厳ある人々を、文字にうつしかえていく営為は、文学の領域をまもりながら、もっともするべく政治の領域におしひいていくことでもあり」と評価する。結論でも「政治的文学作品」と呼んでいるが、後の批評で取り上げられるナシヨナリズムについてはほとんど触れられていないのは論の弱点だろう。しかし、沈黙の言語化についてさらに、「水俣病患者の沈黙を見事な言葉に還元しえた石牟礼道子の『苦海浄土』に比すべきものといつてよいかも知れない。(略)『苦海浄土』の多分にファンタジックな情景、その薄い絹のような雰囲気につつまれて、患者の言葉もまた、多分に幻想風にかたられていくが、その幻想によって、現実を数倍もするべく描写するという手法を、私は『苦海浄土』と同様にこの『ヒロシマ・ノート』にも発見せざるをえなかった」と述べている。

二〇一一年の福島第一原子力発電所の事故以降、『苦海浄土』の読み直しが盛んになったが、『ノート』と比較する菊地論は改めて注目できる。

磯貝英夫「『ヒロシマ・ノート』(大江健三郎)——想像力への旅——」(『國文学 解釈と鑑賞』五〇・九、一九八五・八)は、「原爆文学」特集号に掲載された『ノート』の叙述方法や構成に注目し、「分類すればルポルタージュのなかに入るであろうが、ルポの最も重要な要素としての事実記録の側面は、どちらかといえば稀薄で

ある。(略) 事実を記すことばは相対的に小さく、思い入れのことばが大きい」く、「筆者が直接にぶつかった例は多くはなく、机上で採集したものや、聞き書きが多いようだが、かれは、想像力を励起して、その人々に同化し、「広島」を生きてみようとする」ことから、「このノートは、大江健三郎の内面のドキュメントと呼んでもよいものである」とまとめている。「主題が明確に、集中的に姿を現すのは、第三章以下である」という指摘があるが、構成を論じたものは磯貝以前には少ない。後の高橋論では第一・二章との違いが仔細に論じられている。

こうして『ノート』の作品論が発表されていくものの、従来のな評価や批判が一九九四年のノーベル賞以降でもなくなるわけではない。長岡や黒古が用いた「真摯さ」は、一般読者に向けた紹介にも浸透し、たとえば**文藝研究**プロジェ編者『よくわかる大江健三郎』(ジャパン・ミックス、一九九四・一二、一〇一頁)は、「いわば本書は、広島と出会うことで、「戦後民主主義の作家」という公式的な立場から、悲惨さと戦うナマの人間の姿に接して、人間とは何かという根源的な問いを抱くひとりの真摯な作家へと脱皮していく過程の記録であるとも言える」とまとめている。批判としては中村泰行『大江健三郎——文学の軌跡』(新日本出版社、一九九五・六、一二五頁)が、「実存主義と民主主義との関係を何ら合理的に解決していないにもかかわらず、あくまで「自由で不安な内部」にのみ依拠しながら両者を結合させようとし、のみならず、民主主義思想の土台に実存主義モラルをすえようとするところに、大江の文学的課題の困難性があるのである」と述べている。

しかし九五年以降は大きな変化が見られる。一つは同時代の政

治的文脈、特にナシヨナリズムとの関わりを精緻に分析・批判する論文が発表されることである。

團野光晴『「ヒロシマ・ノート」とナシヨナリズム——六〇年代と大江健三郎の問題』(『昭和文学研究』二九、一九九・九)は『ノート』とナシヨナリズムの関係を本格的に論じた論文で、以降の研究でもたびたび参考文献として挙げられる。團野は同時代の出版・論壇・大衆の状況を踏まえながら、出版直後「観念的」と批判された『ノート』が一般に受け入れられた背景にナシヨナリズムに結びつく純愛ブームがあったこと、『ノート』第四章以降に見られる「精神主義的なナシヨナリズム」は「中国の核実験を頂点とするナシヨナリズム」への対抗として打ち出されていること、「そこには中国Ⅱアジアへの道義的責任意識が欠落している」ことを論じている。その上で、初出で書かれ初刊で記述が増補される第三章の「韓国・朝鮮人被爆者のエピソード」は「ヒロシマ以前」への配慮に見えるが、「自民族中心主義に繋がりがかねない意味合いを持つてくる」ことも問題として挙げている。アジアの被爆者については後に見る川口論、北山論、呉論でも論じられる。

川口隆行『原爆文学という問題領域』(創言社、二〇〇八・四)は、原爆文学と戦後日本のナシヨナリズムの関係を述べるなかで、「原水禁運動が「被爆者」を「唯一の被爆国日本」を代表する国民的主体」として立ち上げるものであったとすれば、『ヒロシマ・ノート』は、そうした狭義の政治目的を意識的に避け、ヒューマニスティックに「被爆者の同志」たることを誓うことによつて、国民統合に入った亀裂を想像的に修復しようとした作品のひとつといえよう」(二二頁)と分析する。また『ノート』における朝鮮人被爆者の記

述にも言及し、「朝鮮人被爆者への注目も、戦後日本社会において忘却された記憶を、新聞記事の連載や体験記に残るわずかな痕跡を手がかりとして、何とか掘り起こし甦らせようとする強靱な意志の現れであろう。(略)だがやっかいなのは、こうした周縁化された者の配慮に満ちた、過去の反省的な行為としての反忘却の営みにさえ、自己防衛のナルシズムが滑り込んでしまうことにある」(八一―八二頁)と論じており、團野論と問題を共有する。

一方で、ナショナルな語りだけに回収できない、語りのずらしに注目するのが、成田龍一「方法としての記憶——一九六五年前後の大江健三郎」(『文学』六・二、一九九五・四)である。大江の手法が山代巴の記録運動とは異なり「沈黙や忘却すらも記憶の表象として」「語られたことをつみあげる方法」をとっていること、そのことで「被爆者の記憶を「日本人」の記憶とし、「日本」の経験と総括し、「日本」「日本人」という単一のアイデンティティへと方向づけてしまう」問題があること、しかし後の沖繩の経験は「語りの統一体として設定した「日本」「日本人」をこわす作業」となり『ヒロシマ・ノート』での「日本」への回収が直ちに解体されていることを指摘する。後述するように『ノート』におけるナショナルリズムをめぐっては『沖繩ノート』とも合わせて引き続き議論されていく。

九〇年代半ば以降にもう一つ目立つのは、海外の研究者による批評の登場である。日本の原爆文学を論じた大著である、アメリカのジョン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く——日本文学と原爆』(水島裕雅・成定薫・野坂昭雄監訳、法政大学出版社、二〇一〇・七。原著一九九五)の第七章は大江に当てられ、『ノート』を中心に論じている。「サルトル経由の実存主義的言説」(三一九頁)

が具体的に示されたテキストとしてとらえ、特に「他者」the Otherの概念(三三〇頁)に注目し、「他者」は、私たち人間の実存の完成において脅威ともなるが、また必要不可欠な力でもあり、「他者」との最初の遭遇によつて、私たちは勇氣づけられると同時に、また脅かされるもする。(略)『ノート』は被爆者——残虐行為による「具象化」reificationに抗して闘っている人々——を、大江が怖れ、かつ尊敬している「他者」として、遠回しに拮据して定義したものととして読むことができる(三三九頁)としている。

そのほかに、タイのクラウブロットク・ウオララック『大江健三郎論——「狂気」と「救済」を軸にして』(専修大学出版社、二〇〇七・二、四三頁)が「大江はこの調査の旅を機に、反核意志の強い被爆者たちに出会い、「広島のなるもの」である原爆・核の破壊力の恐ろしさ・悲惨さを実感するようになった」と述べ、中国の王新新「再啓蒙から文化批評へ——大江健三郎の一九五七―一九六七——」(東北大学出版社、二〇〇七・二、一六四頁)が、『ヒロシマ・ノート』と『沖繩ノート』において、大江は歴史、現実、思想、文化及び生命についての認識をその中に注ぎ込み、それを単純な歴史的記述から文学的イメージに転化することよつて、作家としての社会批評と文化批評の意識を示した」と述べているが、いずれも概要にとどまり、トリートのような本格的な分析までには至っていない。

二〇〇〇年代以降は、従来の批判を踏まえつつ、『ノート』の新しい読みを探る論文が現れる。政治的な背景ではなく、これまで比較されることのなかった作品や資料を用いたり、テキストの加筆修正に着目したりするのが特徴である。

川邊紀子『ヒロシマ・ノート』と『人生の親戚』——大江健三郎の〈文学的想像力〉について（言語・文化研究論集」三、二〇〇三・三）は、『ノート』と小説『人生の親戚』（一九八九）の共通点として、「アレゴリーの志向性を持って書かれた作品が、シンボルを作り出す作用を同時に持ちえてしまう」問題を指摘している。『ノート』を「政治的なものではない」と意味づける意見には同意したが、『個人的な体験』『空の怪物アグイー』以外の比較は新しい考察の可能性を含んでいる。

吉田美恵子「大江健三郎『ヒロシマ・ノート』と三つの小説」（国際関係・比較文化研究」一〇・一、二〇一一・九）は、『ノート』における作家の認識変化が「空の怪物アグイー』『個人的な体験』を経た『万延元年のフットボール』という「傑作」につながるという内容である。その結論はやや大げさな印象があるが、加筆されたプロローグに大江の変容をとらえる視点は、以下に見る高橋論や北山論にも通じている。

高橋由貴「記録する機械の眼から『広島レンズ』へ——大江健三郎『ヒロシマ・ノート』論」（『日本近代文学』八六、二〇一一・五）は、これまでの『ノート』評価の要点をまとめ、初出から初刊への変化や、同時代のルポルタージュや写真、先行する大江のルポルタージュとの関係を丁寧に辿っている。「プロローグ」「エピローグ」の付与、I・II章の加筆修正、『ピカドン』という挿絵の添付によって、ルポルタージュという当初の形式は完全に消去される。そして「真に広島の人間」なる人々の肉眼・肉声で捉えられた観察と表現を中心化し、さらにそれを核時代に生きた「人類」へのメッセージとして呈示することがこの本の主眼として企図されたのである」

とテキストの成立を論じている。

また高橋由貴には他に、「大江健三郎『アトミック・エイジの守護神』論」（『日本文学』六六・一一、二〇一七・一一）もある。ここでは「アトミック・エイジの守護神」の結末が「原爆被災という限界状況を生き抜く広島の人々を「絶望しすぎず、むなししい希望に酔いすぎることもない人間、すなわち真の意味で、ユマニスト的な人間」として見いだした『ノート』の一節につながっている」と指摘している。先行論批判として「大江文学を（原爆文学）の枠に押し込めてしまうことは、実は原爆には直接結びつかない文学的営為を見落とすことになりかねない」と述べているが、『ノート』を柔軟に読み解く提言として受け止めたい。

北山敏秀『ヒロシマ・ノート』における「原水爆被災白書」の思想——「被爆者」について語ることに、その「批判」に対する意識のあいだ——（『日本文学』六六・一一、二〇一七・一一）は、『ノート』と金井利博による「白書」作成運動との関わりから分析し、「沈黙」に曝されてきた「被爆」の時点からの個別的な生の時間に目を向けようとする点で、先に見た金井による「白書」提案の視点との類似性がある」ことを指摘する。そして「金井による「白書」作成の提案の文言では、「被爆者の範囲」はあくまで「日本人」に限られていた」が、「大江は、その金井の文言とは異なり、文学テクストとしての『ヒロシマ・ノート』において、「日本人」に対して周縁化された人々に想像力を向け、「自らの語りを差異化する運動」が行われているとして、韓国人被爆者への言及や『沖繩ノート』を例に挙げている。成田論と異なる角度からナショナルな語りのずれを見る論といえる。

しかし、台湾の呉叡人『台湾、あるいは孤立無援の島の思想』（駒込武訳、みすず書房、二〇二一・四）は、「沖繩」は方法論上の他者として「自己／日本」の注釈と解釈に利用され、「自己／日本」との対比と差異化のために利用され、「自己／日本」を確認、再確認するために利用され、「沖繩ノート」は『ヒロシマ・ノート』からの「植民地的拡大」(colonial extension)であつて、同時に「植民地的変^{ヴァリエーション}奏」(colonial variation)でもある(二二二頁)と述べられるように、語りのずれを指摘した方法が逆にナシヨナリズムを補強している¹と厳しく見ている。これは團野論や川口論が述べた朝鮮人被爆者をめぐる記述のあり方に通じている。呉は大江の執筆方法では「弱者との連帯の喪失」(二三四頁)になるというが、その「再生」の可能性は大江が描いてこなかったもの(たとえば「台湾」)にあるのではないかと、被爆した台湾人女性研究者を紹介して結んでいる。

山本昭宏『大江健三郎とその時代——「戦後」に選ばれた小説家』(人文書院、二〇一九・九)は「大江は、広島から人類に至るスプリングボードとしての「日本」の役割を強く意識していた」(二二頁)ことを指摘しつつ、注の記述ではあるが、「国内の被爆者運動が、韓国を含む海外在住の被爆者たちを本格的に取り上げることになるのが一九六〇年代の後半以降であるのを考えたとき、やはり『ヒロシマ・ノート』という広く読まれた著作のなかに、韓国人被爆者が書き込まれた意味は大きい」(二二三頁)と述べている。『ノート』における韓国人被爆者の記述については今後も「連帯」の可能性と不可能性の揺らぎとして言及されると思われる。

また別の観点では、イタリヤのキアラ・コマストリ「被爆体験

を(書く)——山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』を中心に——」(『原爆文学研究』一三、二〇一四・一二)が、『ノート』について「前景を占めているのは、広島ではなく、広島に出会って感動する大江であり、読者は大江の感動を追体験することで感動したのではないかと感じられる」という一方で、『ノート』の翌月に同じ岩波新書から刊行された『この世界の片隅で』について「広島の「現地に密着」して「この世界の片隅」から「被爆からの二十年の歴史を明らかにしよう」とする本書は、現時点から見るとき極めて重要な仕事であるが、発刊当時はともかく、その後急速に忘れられていったように思われる」と述べている。ここで詳細な検討は行われていないが、成田論でも山代巴の仕事が挙げられており、菊地論では『苦海浄土』が挙げられていたように、記録を含む文章との比較は課題として残されている。

批評史の最後に見るのは自作解説である。「半世紀後の『ヒロシマ・ノート』」(『早稲田文学』二〇一五・秋、筑摩書房、二〇一五・八)の振り返りに至るまで、『ノート』についてもっとも多く言及してきたのは大江健三郎自身かもしれない。「なにを記憶し、記憶しつつけるべきか?」(広島市原爆体験記刊行会編『原爆体験記』朝日新聞社、一九六五・七)では、広島で聞いたアメリカ人記者と盲目の老被爆者の挿話が回想されているが、『ノート』第二章での被爆者のスピーチに基づくものであり、原爆被害者援護法制定の請願運動について書いた「被爆者の自己救済行動」(『世界』一九六七・五)では、「ばくはこの数年間、いくつかの広島に関わる文章を書いてきたが、そのルポルターージュの制作過程で僕があつた問題の、緊急で本質的なものはすべてここにつくされている」と『ノート』の体験に接続し

たり、『ノート』第三章の「毎月五千円の漢方薬を服」む老婦人を再び書いたりする様は、自己引用を特徴とする大江の小説に重なって見える。再刊⑨に収録された自作解説「未来へ向けて回想する——自己解釈(二二)」では、「この仕事を通じて僕は、異常児として生まれた長男ときっかけとして自分のおちていった退嬰的な顔龐から脱け出すことができたのであった」(二二七頁)と『ノート』と長男誕生の関係を改めて強調し、「重藤博士の実践に裏うちされた思想は渡辺一夫がフランス・ルネサンス研究によつてつちかったユマニスム思想に直接つうじていたのであった」(二二五頁)と師・渡辺一夫との結び付きも示唆するようになる。再刊⑩の「解説」(三八三頁)では、「広島の実像とはほど遠い評がある」と述べた金井利博の存在が小説「さかさまに立つ「雨の木」(文藝界一九八二・三)の創作に向かわせたと述べている。『ノート』の自己評価の変遷から小説創作の方法を考えてみてよいだろう。

これまでの『ノート』論は、大江の個人的な体験が記述に反映していること、大江の先行するルポルタージュや同時期の小説と関わりがあること、政治的な文脈から影響を受けたことについて多く論じられてきた。アメリカ、韓国、中国ほか諸外国との関わりからも引き続き考えていく必要がある。そうした『ノート』への影響とは逆に、『ノート』が他の作家・作品にどのような影響を及ぼしたのかということも考えられるのではないだろうか。麻生丈士『原発を読む——チェルノブイリ・ノート』(八月書館、一九八八・一)、朝日新聞長崎総局編『ナガサキノート——若手記者が聞く被爆者の物語』(朝日文庫、二〇〇九・七)、朝日新聞長崎総局編『祈りナガサキノート2』(朝日文庫、二〇一〇・七)、フエリエ・ミカエル

『フクシマ・ノート——忘れない、災禍の物語』(義江真木子訳、新評論、二〇一三・一〇)と、いま思いつくままに挙げてみたが、内容はともかく、題名は大江が広島原爆を取材した『ノート』が念頭にあったことは疑いない。また劇作家の大橋喜一は「一九六五年まで私は広島に目を向けませんでした、ある衝撃がきっかけで私の作品が一貫して原爆関係のものに変わつてい」つたとして『ノート』を挙げ、「映画でも原爆の作品はいろいろ生まれていました、私は、まだ描かれていない形で広島を描かねばならないと考え、開業医を主人公とした「ゼロの記録」(一九六八年五月公演)を創作したことを明らかにしている(「原爆と私」とつての劇作」、ほるぷ出版編集部編『反核——文学者は訴える』ほるぷ出版、一九八四・四)。右は一例にすぎないが、大江の作品だけではなく他作家の作品との併読という形で『ノート』を再読することができる。引き続き『ノート』をめぐる研究、創作に注視したい。

※ 岩波新書の一九九五年六〇刷における差別表現の修正については岩波新書編集部にご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

※ 本特集は第六四原爆文学研究会(二〇二一年九月一八日)で行った「原爆文学」再読8——大江健三郎『ヒロシマ・ノート』での報告をもとにしている。当日は山本昭宏氏、高橋由貴氏、楠田の三人が登場したが、今回は山本氏と楠田の報告を掲載した。掲載できなかった高橋報告の原稿化は今後を俟ちたい。なお報告内容は「原爆文学研究会報」第六四号(二〇二一年二月)で読むことができるので参照されたい。